

社会科授業改善，評価の視点

大橋 忠正

(初等教育学科教授)

I 問題の所在

社会科は、教育基本法が定める教育の目的にかなった教科である。教育基本法第1条「教育の目的」の中の「民主的、平和的な国家・社会の形成者として」の語句は社会科の教科目標と同様である¹⁾。果たして、社会科教師はそれに応える教育を適切に行っているだろうか。

小・中学校で履修した学生 of 社会科に対する印象は、中学生では暗記教科、小学生では自分達で調べて終わる学習との回答が多い²⁾。全国小学校社会科研究協議会会長は、この傾向について「近年の社会科授業は活動があつて指導がない。深まりがない。子ども任せの授業」と批判している³⁾。教師は、他教科に比べて社会科は指導が難しいと語りながら、一方で校内研修の教科に社会科を上げていない実態がある⁴⁾。平成21年度広島県内の小学校の研究公開、延べ473校中「社会科（生活科を含む）」をテーマとした研究会は9校（2%）に留まっている⁵⁾。

我が国高校社会科には、建前の目標と本音の内容優先の科目分化（現代社会，地理，日本史，世界史等）の二重構造を抱えてきた変遷の経緯がある⁶⁾。同じ様に、小学校社会科教師には建前と本音があるのではないか。「社会科は指導力が求められる」と考える建前の一方、全国学力調査など公的な評価が問われないことによる研修先送りの実態があるのではないだろうか。

このような社会科指導の課題を受けて、本稿では、次の三つの改善事項を提起する。一つは、社会科授業設計における授業成立の二側面の機能の整備と評価である。1点目の授業前の教師による授業計画書の作成の側面、適正であれば

一定レベルの社会科授業は成立する。2点目の授業時に教師と子どもで個別的・創造的に授業を創る側面、子どもの発言を生かした授業の展開となり、新たな学習内容を付加した授業展開が創造される。これら2点を検討・評価することで教師の授業力と子ども理解力は向上する。二つは、社会科自己教育力の育成を図る教授・学習過程の調和である。授業を構成する教授・学習過程において、教師の教授活動と子どもの学習活動の調和を図ると授業の中での子どもの自己教育性は促進する。更に、この授業構成の継続の後、発展学習の場を設定すると、自己教育力の一層の発揮が期待できる。また、その学習活動には「授業のまとめノート」の活用が有効である。三つは、客観的な授業分析による授業評価である。社会科授業計画書は仮説に過ぎない。授業評価はそれが適切であったかを確かめる検証活動に相当する。それには客観的な授業分析による評価が有効である。

以上の社会科授業改善，評価の視点について社会科授業事例をもとに検討を行っていく。

II 社会科授業設計，評価の構想

1 社会科授業の基本原則

(1) 社会科学力・社会科で育つ子どもの学力像
社会科は、民主的社会的な構成員の育成を目的とする。学習指導要領で定めた各学年の内容の理解を通して公民的資質を養うことを目標とする。社会科の究極のねらいである公民的資質の育成は、事実認識から価値認識に至る学習活動を方法原理とする。事実認識とは、社会的事象の機能的側面の理解、価値認識とは、事実認識

に裏付けられた価値的側面の理解を意味する。

学習指導要領の「態度にかかわる目標」は価値認識に相当する。この態度目標は、授業場面では社会的行動、態度として現れるよりは、その前段階の心的態度の価値的な認識活動として現れることが多い。それは社会的事象に対する共感や敬愛等の情意であり、事実認識に基づき自ずと形成される認識活動である。

社会科の学力は、理解、能力、態度の総体の育成にあり、授業目標は観点別目標で具体化される。指導要録の評価の四観点には、次の相互関連が考えられる。「知識・理解」「観察・資料活用、技能・表現」「社会的思考・判断」の三観点は、認知的側面、事実認識にかかわる観点である。一方、「関心・意欲・態度」は各子どもで事実認識における個性的統一を目指すもので情意的側面、価値的側面を伴う観点である⁹⁾。

したがって、学習指導案に観点別目標を記述することは、事実認識から価値認識に至る授業構成を考える際には欠かせない作業手順であり、社会科の学力診断の指標になる。

(2) 社会科授業設計の二側面

社会科授業は、授業前に学習指導案、学習指導細案、教材から成る授業計画書（以後、授業計画書と記す）に基づき客観的・科学的に創られる側面と授業実施時に子どもの発言、活動によって個別的・創造的に創られる側面がある。それぞれ欠かせない両側面であるが、社会科授業の成立には前者の授業計画書の作成が前提になる。

授業計画書の整備には、目標の明確化、内容の構造化、方法の具体化が考えられる。目標の明確化とは観点別目標の設定、内容の構造化とは学習内容（知識）の構造化である。知識には、事實的知識（事実認識）と価値的知識（価値認識）があり、事實的知識（事実認識）には、記述的知識（個別の事象を把握する知識）、説明的知識（事象間を説明する知識）、概念的知識（事象間を一般化・法則化する知識）がある。価値的知識（価値認識）とは、事象の在り方を問う判断的な知識・規範的知識をいう⁹⁾。このように、各単元の学習内容を構造化して捉えると

目標との関係が明確になり、毎時の学習過程の段階的な指導の目安になる。

方法の具体化とは、「問い」の過程の具体化である。授業の中核は、教師と子ども間のコミュニケーション活動、その先導は教師の発問である。学習指導案を授業レベルで実施可能な状態、即ち、問いと予想される答えのコミュニケーションに具体化したのが学習指導細案である。

2 教授・学習過程と自己教育力

(1) 授業における教授・学習過程の調和

授業とは、時系列による展開であり、教授過程と学習過程から成る。教授・学習過程（teaching-learning process）とは、外側からの教師による人類文化の伝達過程（教授過程）であり、子どもの内側でのその知識・技能の習得による自らの認識能力、人格の諸特質の発達過程（学習過程）である⁹⁾。そこには外側からの知識・技能を習得する自己活動が子どもの内に存在する。自己教育力であり、毎時の授業では子どもの自己教育性・自己教育力が内在していると考えてよい。その発動が消極的・微動に留まるのは教授過程と学習過程の不調和による。授業の中で、教授活動過多の時間を重ねると子どもの学習意欲、学び方能力は減退する。一方、教授活動に伴う自己学習、自己活動の場を設定・保障すると子どもの自己教育性は促進される。大学授業における「受講者ノート」の活用は、授業における教授・学習過程の調和にほかならない¹⁰⁾。

(2) 「生きる力」（自己教育力）と社会科発展学習

教授・学習過程の授業原理に即して毎時の授業構成を考えると、授業内容＝教材内容＋子どもの反応（自己教育活動）となる。授業の中で教師の教材内容の伝達に対して、子どもの反応の場を設定すると、子どもは自己教育性を発動し、自己教育力を発揮した学習を展開する。それが顕著に表われるのは授業内容の蓄積による一定期間の授業後の自主学習・発展学習の場である。それは次の過程で行われる。

授業原理＝教授活動・伝達過程＋学習活動・発達過程

授業内容（A）＝教材内容（B）＋子どもの反応

(C) 大学シラバス15回の場合
自己教育力=授業内容の総合(A1~A14)+
子どもの反応集積, 発展(C14+発展学習)

3 社会科授業改善, 評価の方法

(1) 最善の授業計画書による実験授業(研究的な誇張授業)の実施

最善の授業計画書による実験授業(研究的な誇張授業)を行うと, 子どもの学習の到達点の高さが捉えられる。教師にとって, 子どもは育てるところまで育つという到達点の子ども像を, 発達段階相応にどれだけ高く描くことができるか, その描く到達点の高さが教師の授業力向上に深くかかわってくる。常に, 教師は, 育つ子ども像の目安の高さを自ら内に持ち, 日頃の指導の拠り所にしてしているからである。教師の授業力のレベルと授業で育つ子どものレベルの予測は相関関係にあり, 授業で子どもが育つ目安を高く予測し, 実証できる教師ほど授業力の可能性(Potential)が高いことになる。その目安の高さを極めるには, 通常の授業だけでなく実験授業(研究的な誇張授業)の実施が有効である¹¹⁾。

(2) 定性的評価と定量的評価

授業の評価方法には, 授業の直接観察・逐語記録による定性的評価と授業の逐語記録の視点分析, 数量化による定量的評価がある。定性的評価は, 教師の言語, 子どもの発言, 授業の雰囲気など直接的に捉えた診断・評価に特徴がある。定量的評価は, 科学的手順に基づく授業コミュニケーション分析による評価をいう。数量化, 波型で表わすことができ, 定性的評価の客観的裏付けとなる。社会科授業コミュニケーション分析カテゴリーには, 学習活動に関するものと学習内容に関するものがある。すでにこの方法による評価事例には蓄積が多い¹²⁾。

(3) 上位学年生徒を対象・モデルとした実験授業の評価

授業展開の方法及び教材(資料)の診断には模擬授業などが実施される。その場合, 学習・評価モデルの選択には同学年児童生徒より上位学年生徒の方が認識能力が高いため, 指導方法, 教材の診断には有効である。下位学年児童を対象とした優れた授業実践や教材(資料)に共感

する上位学年生徒は多く, 一方, 上位学年生徒が発想した教材(資料)に授業で関心を示す下位学年生徒も多い¹³⁾。そこで, 本稿で扱う授業計画書, 授業実践評価の対象には大学学生の反応を適宜加えていくことにする。

Ⅲ 社会科授業実践, 評価の事例

1 最善の授業計画書に基づく授業実践と評価

C教諭の授業計画(第6学年単元「15年続いた戦争」(1995. 10. 31実施))の概要は次の通りである¹⁴⁾。

(1) 授業計画の概要

●本時の目標

太平洋戦争の頃の記録や経験談などから, 高知県の子供達は, 戦争の影響を受けながら学校生活を送っていたことが分かる。

●指導過程

- 1 戦時中の子どもと現在の子どもの身長を比較して話し合う。 []は資料
 - ・当時のくらしや食事の様子 [「身長の年代的推移」「戦時中と現在の身長, 体重」]
- 2 戦時中の子ども達の学校生活を調べる。
 - ・「小学校生活思い出ベスト3」を比較する。 [アンケートの集計結果]
 - ・現在: 1位 修学旅行 2位 音楽会
3位 合宿
 - ・戦時中: 1位 食糧不足 2位 勤労奉仕
3位 学校でのいも作り
- 3 貞広さんの手記から戦時中の学校生活について考える [手記「くろ虫とり」]
 - ・当時の学校生活が分かる個所を見つける。
 - ・当時, よく使われていた言葉を見つける。 [ポスター]
 - ・「銃後を守る少国民」「ぜいたくは敵だ」「ほしがりません, 勝つまでは」[写真]
- 4 貞広さんの手記などから, 当時の学校生活について自分なりの考えをまとめる。

(2) 定性的評価による授業結果の分析と考察

C教諭の授業の逐語記録から教師の発問と子どもの発言の取り扱い, 教材・資料と歴史的思考力の関係についてまとめると次のように分析, 考察ができる。

ア 教師の発問と子どもの発言の取り扱い（結語で記述）

イ 子どもの授業のまとめノート（略）

ウ 教材・資料の意図と歴史的思考力

C教諭が用いた資料6点は，小学校社会科歴史学習がねらう歴史的思考力（①今昔の違いの把握 ②変化変遷の把握 ③因果関係の思考力 ④時代の特色把握 ⑤歴史的事象の比較）の育成と関連がある。本学学生はこの授業の逐語記録を読み，次のように評価している。

・単元「15年続いた戦争」では，小学校歴史学習のねらいが沢山盛り込まれている。導入では戦時中と現在の身長や体重を比較している。今昔のちがひ，変遷が分かる能力を問うている。そこでは，年代的推移を資料活用で読み取らせ，それは食糧不足に伴う栄養不足のためと因果関係を考える能力を養い説明的知識を身に付けさせている。資料「くろ虫とり」の作文からは当時の「銃後を守る少国民」という時代の特色把握もできる。「小学校生活思い出ベスト3」からは歴史的事象の比較。1つの授業で小学校歴史学習の5つのねらいを盛り込んだ素晴らしい授業だと思う¹⁵⁾。（渡邊安奈）

(3) 定量的評価による授業結果の分析と考察

◇社会科授業コミュニケーションによる評価

社会科授業を成立させるコミュニケーションには，学習活動に関するものと学習内容に関するものがある。そのカテゴリーの設定は次の通りである。

ア 学習活動分析のカテゴリー

学習活動に関するコミュニケーションは，表1の通りである。

確かな事実認識を図るには，全カテゴリーの使用と低位，中位，高位の使用割合に偏重がない学習活動が望ましいといえる。

イ 学習内容分析のカテゴリー

学習内容に関するコミュニケーションには，社会的用語使用がある。教師の発問に対して，子どもはそれにふさわしい活動を展開することになるが，その際，社会科の学習内容に適合した用語をどのように用いるかどうかが社会認識

表1 社会科学習活動分析カテゴリー

カテゴリー	教師の指導	児童の活動	備考
1	名称(物, 人物)	何, だれ	低位のカテゴリー 社会的事象の把握に 必要な基礎的視点
2	場所(一般, 具体)	場所	
3	時(時点, 時間)	いつ	
4	数量	いくら	
5	状態	どのように	中位のカテゴリー 社会的事象の全体的 な把握の視点
6	目的	何のために	
7	機能	はたらき	
8	理由	なぜ	高位のカテゴリー 社会的事象の意味の 把握の視点
9	推論	考えられること	
10	関連・条件	つながり	
11	結論	わかったこと	

形成に関する評価の観点になる。(表4)

C教諭の授業の授業コミュニケーション分析結果と考察をまとめると次の通りである。

◇学習活動分析カテゴリーによる分析

ア 学習活動分析カテゴリーの使用状況

学習活動全体を通して，ほぼ全てのカテゴリー

表2 時系列による学習活動の分析表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	
	名称	場所	時	数量	状態	目的	機能	理由	推論	関連	結論		
導入	発問			5				1	1			7	
	発言	2		7				5	1			15	
展開	発問	1	2	1	6	3	1	2	1	3		20	
	発言	2	3	1		8	1	3	1	8		27	
終末	発問									1	2	1	4
	発言										1	3	4
計	発問	1	2	1	11	3	1	2	2	5	2	1	31
	発言	4	3	1	7	8	1	3	6	9	1	3	46
合計		5	5	2	18	11	2	5	8	14	3	4	77

リが使用されている。(表2)

学習活動分析カテゴリーを低位，中位，高位のカテゴリーでまとめると，次の通りである。

C教諭の授業 低位30 (39) 中位18 (23) 高位29 (38)

()内は比率

イ 授業における子どもの発言の割合

授業全体の教師と子どもの言語の割合を調べると，この授業は発問数28，発言数46，総数74の授業コミュニケーションになっており，発言率は62.1%である。(計の発問数31は1発問に複数の問いがあるため)

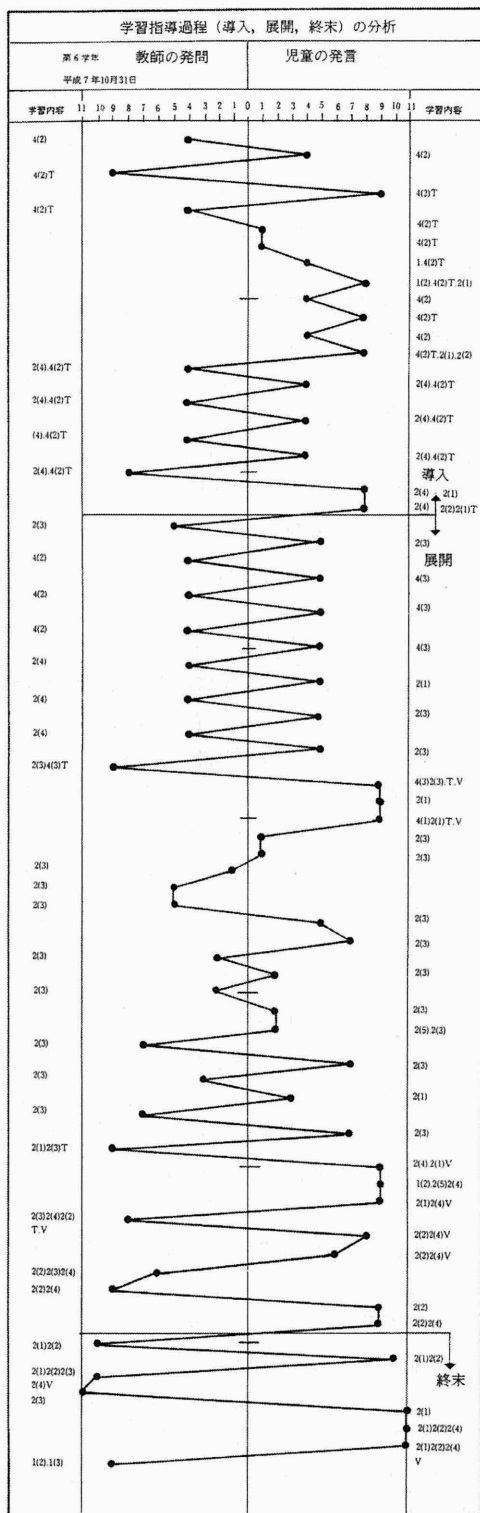
ウ 価値意識を伴った発問，発言の状況

価値意識を伴った発問，発言の数を集計すると次の通りである。

C教諭の授業 発問2 発言8 合計10

エ 学習指導過程分析波型図

表3 学習指導過程の分析波型図



C教諭の波型図(表3)から、低位、中位、高位の各カテゴリーの推移のみを記すと次の通りである。

導入発問: 低—高—低—高 (計7)

発言: 低—高—低—高—低—高—低—高—低—高—低—高 (計15)

展開発問: 中—低—高—低—中—低—中—低—中—高—中—高 (計18)

発言: 中—高—低—中—低—中—低—中—高—中—高 (計27)

終末発問: 高 (計3)

発言: 高 (計4)

◇学習内容分析カテゴリーによる分析

ア 社会科的用語使用の状況 (学習内容分析カテゴリー)

本単元の学習内容では、本時と前時の学習内容にかかわる社会科的用語が使用されている。(表4)

表4 社会科的用語使用の状況 (学習内容分析カテゴリー)

第6学年単元「15年も続いた戦争」	導入		展開		終末		計		合計
	発問	発言	発問	発言	発問	発言	発問	発言	
1 第二次世界大戦と日本	1	1					1	1	2
(1)日華事変 (原因 戦況)									
(2)太平洋戦争 (原因戦況)		1	1	1			1	2	3
(3)日本国内の戦禍					1		1		1
(4)アジア諸国民の被害									
2 戦時中の国民生活									
(1)くらし (食料・日用品不足)	4	1	6	2	4	3	14	17	
(2)政治、産業の変化	2	3	4	2	3	5	9	14	
(3)学校生活 (勤労奉仕・学後勤)			13	13	2		15	13	28
(4)子供 (意識 体位)	4	5	6	6	1	2	11	13	24
(5)徴兵制度、出兵				2				2	2
3 戦後の日本									
(1)日本国憲法の制定									
(2)政治、社会の改革									
(3)講和条約									
(4)経済の復興、発展									
4 現在の国民生活									
(1)くらし (食料 物の豊かさ)									
(2)子供 (意識 体位)	7	13	3				10	13	23
(3)学校生活 (主な行事)			1	4			1	4	5
T 時間意識	6	13	3	2			9	15	24
V 価値意識			1	7	1	1	2	8	10
計	12	26	27	36	9	9	48	71	119

イ 社会科的用語使用の範囲と頻度の分析

社会科的用語使用の範囲とは、導入、展開、終末の各段階における発問、発言がいくつの範囲の社会科的用語を用いたかの範囲数を数えたものである。同一カテゴリーの最高頻度数とは、導入、展開、終末の各段階における発問、発言の中で、同一カテゴリーの中で最も多い使用頻

表5 社会科的用語使用の範囲と頻度の分析

社会科的用語	導入		展開		終末	
	発問	発言	発問	発言	発問	発言
カテゴリーの数(範囲)	3	6	6	7	6	3
同一カテゴリーの最高頻度数	7	13	13	13	2	4

度数を数えたものである。(表5)

(4) C教諭の授業診断・評価の考察

授業コミュニケーション分析結果から，次の諸点の考察ができる。

① 学習活動分析カテゴリーの使用割合と指導過程の記述

学習活動分析カテゴリーの使用割合が社会科学習活動の質を規定する。確かな事実認識と低位，中位，高位のカテゴリーの使用割合は関係がある。学習指導案の指導過程の項の学習内容の記述には，各カテゴリーで得られる異なる知識(記述的知識，説明的知識，概念的知識)の記述があることが望ましい。C教諭の指導案にはそれが構想されている。

② 学習指導過程の分析波型図と学習指導細案
 分析波型図と事前の発問構成は関係がある。学習指導細案の発問と予想される発言の適否の検討が必要である。C教諭の波型図には終末段階の高位のカテゴリーのほかは細案の発問，発言とは異なる波型が見られる。これは個別的・創造的に授業が展開していることを表している。

③ 社会科的用語使用と指導過程における学習内容の記述と教材(資料)の整備

社会科的用語使用の範囲と頻度は，指導過程の各学習段階の学習内容の記述やその学習内容にかかわる教材(資料)の整備状況に関係する。特に，教材(資料)の整備は社会科的用語使用の範囲に影響する。学習内容にかかわる教材(資料)が乏しいと社会科的用語使用の範囲が狭くなる。同じ用語を何度も繰り返すため同一カテゴリーの最高頻度数も増加する。C教諭の場合，今昔の比較教材(資料)の使用が用語使用の範囲に表れている。社会科的用語使用の範囲と頻度の結果は，目標と学習内容の範囲，1単位時間の指導から見て適当である。

④ 教師の指導姿勢と価値意識を伴う発問

通常，子どもの発言に価値意識が伴うのは事実認識の後が多く，その発言は承認されてよい。しかし，発問に価値意識が伴うのは，教師の指導姿勢が情意面で高揚する時が多く，事実認識から価値認識に至る社会科学習原理が見失われる時である。教師の価値意識が先行すると事実認識を不確実にし，子どもの主体的な価値認識形成を妨げる。C教諭の授業の発問2，発言8は妥当といえる。

2 社会科公民的資質の育成と教材(資料)の客観的機能の評価

授業は適正な授業計画書を用いて行うと指導者，学習者を異にしても一定レベルの授業は成立する。教材(資料)も同様である。同一教材(資料)活用による年度別児童の反応の共通性を探ることで，教材(資料)の客観的機能の評価が可能になる。第4学年単元「土師ダムと人々の暮らし」(昭和48年，52年，56年)の計画と実践結果は次の通りである。

(1) 単元「土師ダム」の教材開発と単元構成

単元「土師ダム」は，筆者が教材開発を行い単元内容の構造化，教材内容と資料の整備，単元展開計画の順で教材を作成した。紙幅の都合で一部を記すと次の通りである¹⁶⁾。

○ 教材構成の基本的事項(教材内容)と基礎的事項(資料)

i 「土師ダム」は，県内各地の人々の願いに基づき建設された多目的ダムである。

①江の川沿いに住む人々は，昔から洪水に悩まされ，抜本的な治水対策を望んでいた。

②広島市の給水量の増加，島嶼部の水不足等広島市，県では新水源確保に迫られていた。

③八千代町の灌漑用水の確保が求められていた。

④都市部の電力需要に応え発電所の新設が急がれた。

ii 八千代町土師地区は，ダム建設に必要な条件を備えている。(略)

iii 「土師ダム」の完成は，県内各地の住民の生活を豊かにしている。(略)

iv 土師村には，先人の働きが分かる歴史が残されている。(略)

v 「土師ダム」建設の経緯には、水没に悩む住民の歩みが表れている。(略)

vi 「土師ダム」建設には、土師を離れていく人々とそれを見守る人々がいる。

①水没地区住民への国、県、町からの物的補償は、細部にわたって行われている。

②水没地区住民には、物的補償では償いきれない心の痛みがある。

③土師ダム記念公園の石碑には、水没地区の戸主名が刻まれ、建設省及び八千代町役場では、水没立退者の生活安定度の追跡調査を行っている。

(2) 資料に対する児童、学生の反応

○ 資料に対する年度別児童の反応

紙幅の都合で各資料に対する児童の年度別反応の一部を記すと次の通りである。

i 映画「広島の水」の視聴

48年度 広島市民は水不足について関心を持っていない人が多いようです。私もそうでした。あんな映画をもっといろんな人に見せなければ関心を持たないと思います。(N.T)

54年度 アナウンサーが尋ねると大体の人が「足りています」という答えが多かったけれど、去年のことを考えたらどうでしょう。(S.K)

56年度 みんな油断している。私もその中の一人だ。(略) 水を大切にしていない人にこの様子を見せてやりたいほどだった。(O.K)

ii 読み物資料「のど声忠左衛門と用水路」(略)

iii 年表資料～先例地ダム見学について(略)

iv 立退く住民への償い、両者の立場を表す図表、写真、作文等の資料

◎国、県、町からの償いについて

48年度 小さなものでもちゃんとしていることがわかりました。(K.T)

54年度 木1本、にわとり1羽、球根でもすべてお金で解決しているのに驚いた。(K.N)

56年度 庭木、家など自分の持っているほとんどのものを国や県が補償している。(K.R)

◎お金で償えない心の痛みについて

48年度 いくらいい補償金をもらっても、やっぱり歴史にはかなわないということだ。おばあさんが「仕方ないですよね」とさびしそう

にしているのを聞いて、本当にかわいそうに思いました。(H.R)

54年度 自分達のなつかしい里とお金を取り替えられてしまった土師村の人々がかわいそうだ。(K.R)

56年度 生まれ育ってきた思い出の沢山ある土師を離れなければならない人々の心だけは、お金ではかえられるものではないと思います。(O.K)

(3) 社会科授業と態度目標の育成

社会科の態度にかかわる目標の達成状況は、前述の通り心的態度の価値的な認識活動として表れることが多い。社会的事象に対する共感や敬愛等の情意であり、連帯する個としての自覚に基づく認識である。

◎価値認識、態度表明の記述

48年度 広島市民の声を聞いて、私はまちがいはないけれど、この不自由なく飲める水も、この地区の人々のためだということを知っておいてもらいたいです。(Y.Y)

56年度 水道をひねると出てくるのは水です。この水の中には、水没地区の人々の土師村を思う心が入っています。ほくは土師ダムの学習をしてから、水を大切にしようと思いました。家の人にもよびかけました。兄さんたちは、「そんなことをしてもだめだよ」と言います。でも、ほくはこうでもして感謝しないといけないと思いました。広島の人たちのなかには、水のありがたさがまだよくわからない人がいます。それはほくたちの目につかないところで、水をためる努力、ダムをつくる協力をする人がいることを知らないからです。(Y.T)

「事実認識から価値認識に至る社会科学習原理」。これに類した学生の反応もある。

○ 資料に対する上位学年学生(京都女子大学)の反応

・私は、教材「土師ダム」の中にある「立ち退く人々への償い」を読み、大戸川ダム建設(滋賀県、京都府、大阪府知事による建設中止)のために立ち退いた人々のことを思い出した。土師ダムのように人々の生活になくってはなら

ないダムになっても、立ち退いた人々の心の痛みは消えないけれど、大戸川ダムのように建設が中止になってしまったら、このむなしさをどこにぶつけたらいいのかと思うと、心が痛みます¹⁷⁾。(木村ひかり)

3 「自己教育力」と社会科発展学習

大学授業に「受講者ノート」を活用すると学生の自己教育性が促進され、社会科発展学習(レポート作成)においても自己教育力が発揮される。「社会科教育内容論」(2009年後期実施)の各学生による共同地域調査研究の演習テーマと一部学生O. T氏の「受講者ノート」と個人レポートの概要を記すと次の通りである。

(1) 地域調査共同研究の演習テーマ

1班	LANDMARK in 東山
2班	京都の町を探検しよう～一条から十条
3班	祇園祭から見えてきた山鉦の実態
4班	清水坂と五条坂の今と昔
5班	京都南座物語
6班	京都タワーの今と昔
7班	西陣織
8班	京野菜
9班	井筒八ッ橋本舗
10班	京都伝統工芸品「清水焼」
11班	七条甘春堂に迫る歴史とお菓子
12班	追跡!! 京野菜私たちの食卓に届くまで
13班	京都の通り
14班	私たちの町・今熊野商店街

(2) O. T氏の「受講者ノート」とレポートの概要

O. T氏の「受講者ノート」と個人レポートの概要は次の通りである。

○ 「社会科教育内容論」の「受講者ノート」

O. T氏の受講者ノートは、「社会科教育内容論」で印刷・配布した「受講者ノート」(合計11回)に3回掲載してあった。紙幅の都合で一部を記すと次の通りである。

◇第2回「第三の教育改革と社会科単科単元指導論(2009.9.25)(略)

◇第4回「第3学年及び第4学年社会科授業論

(1) (2009.10.9)(略)

◇第9回「社会科授業科学論」(2009.11.13)

・今日の授業では「授業は科学と同じ側面をもつ」という言葉がとても印象に残った。授業は子どもと共に創るので毎回違うものになり、中身も時代とともに変わるだろうと思っていたので、どのあたりが科学で客観的なのか見えていこうと意欲をもって取り組んだ。社会科授業の成立には3つの条件がある。目標の明確化、内容の構造化、方法の具体化である。この話を聞いた瞬間に「学習指導案づくりの過程とまるっきり同じだ」ということに気がついた。(略)授業の初めに「授業は科学」と言われたが、「子どもの学習の過程を考えてよく練られた授業計画書が授業を科学にしていけるのだ」と思った。

○ O. T氏のレポートの概要

題名「京都の通り名の秘密を探ろう!!～錦小路通りの秘密」

◇はじめに

(略)京都市には沢山の通りが存在しているが、今回は「五条通り」と「錦小路通り」を中心に取り上げ、人々の生活の様子の移り変わりを今と昔の視点から感じたいと思う。私は、古くは安土桃山、江戸時代から「京の台所」とも呼ばれ京都の人々の生活を支えてきた錦市場を持つ錦小路通りについて研究を行った。

◇計画と方法

わらべ唄「丸竹夷」と錦小路通りの文献資料で大まかな知識を得た後、実際に錦小路通りを歩き、通りや市場の様子を観察する。合わせて、京都市役所で入手した錦小路通りの民家・商店などの分布地図を見ていくことで、錦小路通り周辺に暮らす人々のくらしと街の様子の移り変わりを知り、人々のくらしの変化について理解を深める。

◇本研究「京都の通り名の秘密を探ろう!!～錦小路通りの秘密」(略)

◇まとめと考察

(略)錦市場の様子はとにかく活気がよいという印象である。お店の方から「味見してって」「これおいしいよ」と沢山声をかけてもらった。

(略) これがいにしえから伝わる人情あふれる商売ではないかと感じた。お店の方の心と買い物客の心のやりとりが美しいと感じると共にそうした伝統が今も「生鮮食品No.1の京の台所」として多くの人から愛されるのではないかと思う。(略)

IV 結語

社会科授業改善、評価の視点として、(1)社会科授業設計における客観的機能の整備と個別的・創造的機能の発揮、(2)教授・学習過程の調和と自己教育力の育成、(3)授業計画、授業評価の客観的な方法の究明を図った。その結果、次の4点を明らかにすることができた。

1つは、最善の授業計画書(誇張授業)の実践で得られた授業設計二側面の機能の検証である。事例「15年続いた戦争」は誇張授業計画書である。「学習指導案」の指導過程の学習内容・活動では、記述的知識、説明的知識、概念的知識の段階的学習が構想され、「学習指導細案」では、その認識に必要な低位、中位、高位の学習活動分析カテゴリーの発問が整備されていた。「教材(資料)」の作成では歴史的思考力の育成が意図されていた。この授業計画書による実践、評価の結果、授業計画書が持つ客観的機能が検証された¹⁸⁾。一方、授業の個別的・創造的側面の機能も捉えることができた。次の逐語記録は「学習指導細案」を基軸にした子どもによる個別的・創造的側面の機能の一部である。

冒頭数は応答積算、生徒、教師の積算数。末尾の外は学習活動、[]内は学習内容の記号
8C 5 (身長の年代的推移は) 第一次世界大戦中は上がり、第二次世界大戦のあたりから下がり、終わっても下がっています。4 [4(2)T]
9C 6 そのわけは第二次世界大戦、太平洋戦争になると食生活が変わってきて、身長が伸びなくなったのだと思います。

8 [1(2)4(2)2(1)T]

21C 14 体重は食べ物がありませんから、身長は栄養が足りなかったからだと思います。

8 [2(4)2(1)T]

22C 15 教科書には、「略、さつまいもや雑炊な

どを主食としました」と書いてあるので、あまり食べるものがなかったと思います。

8 [2(4)2(2)2(1)T]

◆65T25 この言葉、貞広さんが考えた言葉? それとも日本全国で言われている言葉? どちらだと思いますか? 9 [2(2)2(4)]

66C 41 日本の政府が考えた言葉だと思います。9 [2(2)]

67C 42 教科書の104頁に載っています。「略、入選作」と書いてあるので、日本国民が使った言葉だと思います。9 [2(2)2(4)]

連続した各発言には子どもの学習の相互関連(記述的知識→説明的知識、理由の発言→根拠を示した理由の発言)が見られ、授業の個別的・創造的側面の機能が読み取れる。C教諭の社会科授業成立の要件と子どもの学習状況のよさの把握が明白になり、教師相互間での授業研究成果の共有が可能になる。

2つは、社会科授業における公民的資質・態度の育成である。事例「土師ダム」では、子どもの事実認識から価値認識に至る学習状況が捉えられた。合わせて、同一教材(資料)活用による年度別児童の反応の共通性を探ることで、教材(資料)の客観的機能が判明した。この結果要因には、次の二点が考えられる。i 「土師ダム」建設は、個と集団の利の対立が避けられない社会的論争問題で民主的社会的の構成員の育成に適当な地域素材である。ii 両者の立場の理解に迫る資料作成には偏りがなく多様な資料形態で整備されていた。その結果「土師ダム」教材は本学学生に対しても、時空を超えた同質の反応を促している¹⁹⁾。教材(資料)が持つ普遍的価値の実証である。

3つは、社会科授業における教授・学習過程の調和と自己教育力の育成である。授業内容は教材内容プラス子どもの反応から成る。教材内容のみが授業内容ではない。この教授・学習過程の調和は、学習者が内に持つ自己教育性の四側面(I「成長・発展への志向」II「自己の対象化と統制」III「学習の技能と基盤」IV「自信・プライド・安定性」)に作用する²⁰⁾。生徒の自己教育性は発展学習にも波及し、自己教育力

の結実を生む。本稿では「受講者ノート」活用による「社会科教育内容論」(2009 後期)の授業の中で実施した地域調査研究のレポート作成が学生の自己教育力発揮の場となった。各学生のレポートには自己教育力の「学習意欲，学び方の習得，生き方の探究²¹⁾」にかかわる取り組みが随所に見られた。その背景には授業における「受講者ノート」の活用がある。この傾向は抽出学生O. T氏に限らず，他の学生のレポートにも等しく認められた。

4つは，上位学年生徒をモデルにした授業計画書・授業実践の診断・評価である。本稿では，上位学年生徒として本学学生を取り上げてきた。結果，学習者，指導者双方の立場に立つ授業評価の反応・データが得られた。今後，教員養成大学・学部の学生を小・中学校の授業計画書・授業実践の診断・評価にあたらせることは意義あることと考える。

21世紀の国家・社会の形成者を育成する社会科教育が担う役割は重い。安定した社会科授業力が各学校教師に求められている。

註

- 1) 「学習指導要領関係資料」(「教育基本法」)『小学校学習指導要領』『初等教育資料』平成20年4月号 32頁 66頁
- 2) 「社会科教育内容論」(2009)「社会科教育方法論」(2010)の受講学生を対象とした聞き取り調査による。
- 3) 豆田啓二「調査結果・分析を授業に生かす」『社会についての基礎的知識の習得に関する調査』総合初等教育研究所 2008年3月 53頁
- 4) 「平成21年度廿日市市内の小学校における研究公開の実施状況」(廿日市市教育委員会調べ)によると教科「社会科(生活科)」をテーマとした学校は1/19校である。
- 5) 「平成21年度広島県小・中学校における研究公開の実施状況」広島県教育委員会事務局 平成21年7月14日調べによる。
- 6) 谷本美彦「社会科と民主主義」『社会科教育学ハンドブック』社会認識教育学会編 明治図書 1994年 17～25頁
- 7) 中野重人「社会科における評価の課題」『小学校教育評価全集社会3』ぎょうせい 昭和59年 18頁
- 8) 岩田一彦『小学校社会科の授業設計』東京書籍 1991年 38頁～45頁
- 9) 柴田義松「教授＝学習過程」細谷俊夫，奥田真丈『教育学大事典』第一法規 昭和54年 336

- 頁
- 10) 拙稿「『社会科教育法』教育の教授方法に関する研究(4)―新教育課程と「受講者ノート」の活用」京都女子大学「発達教育学部紀要」第6号 平成22年2月 92頁
 - 11) 拙稿「社会科授業改善の視点」岐阜聖徳学園大学紀要 第45集 2006年2月 11頁
 - 12) 拙稿「社会科授業評価の視点」全国社会科教育学会「社会科研究」第46号 平成9年3月 2頁～3頁
 - 13) 高知大学「公民科教育法」の「学習指導案作成」の演習課題において山崎あづさ(学生)は単元「夫婦別姓問題と日本社会」の授業の導入に歌「部屋とYシャツと私」(平松愛理)を聞かせて歌詞の一節「あなたの苗字になる私」に注目させた(平成9年1月13日)。また「中等社会科指導法」の同課題において斉藤美那子(学生)は単元「米英・イラク戦争と国際連合」の授業の導入に風刺画「突き落とされた国連よ，このまま死ぬつもりかね？」(朝日新聞2003/5/3)を用いて課題把握を試みた(平成15年9月20日)。いずれも，後年，現場の授業で各資料は高校生，中学生に理解，共感を得ている。
 - 14) 拙書『社会科授業実践学研究』ぎょうせい 2002年2月 185頁
 - 15) 渡邊安奈「第10回初等社会科歴史学習論」(講義「社会科教育方法論」) 2009.6.18
 - 16) 前掲14) 170頁～172頁
 - 17) 木村ひかり「第8回社会的論争問題の教材開発，授業論」(講義「社会科教育内容論」) 2008.11.18
 - 18) 学習活動分析カテゴリーの低位，高位のカテゴリーと三つの知識の関係は次のように逐語記録に見られる。
◆14T 4 ジャあこれ(身長，体重の数量)を見て分かることは？ 4[2(4)4(2)T]
15C 11 戦時中の身長は今の6年生より低く，体重は今の6年生より重い。 記述的知識
◆20T 7 どうして，こんな差ができたのだと思う？ 8[2(4)4(2)T]
21C14 食べ物があまりなかったから栄養が足りなかったからと思います。 説明的知識
65T 25 「この言葉，貞広さんが考えた言葉？ 全国で言われた言葉？ 9[2(2)2(4)]
66C 41 日本の政府が考えた言葉だと思います。 概念的知識
 - 19) 前掲10) 98頁
 - 20) 梶田叙一「自己教育とは何か―基本的な四側面と七視点について」北尾倫彦編『自己教育力を考える』図書文化 1897年 19頁～27頁
 - 21) 河野重男「教育改革と自己教育力の育成」北尾倫彦編『自己教育力を考える』図書文化 1897年 2頁～11頁